

愛知用水運動としての浪曲

はじめに

愛知用水の開削が実現するためには、愛知用水運動と呼ばれる働きかけがさまざまな場面であり、その運動のために多くの人びとが動いていた。そのなかには、安城一帯が「日本デンマーク」と呼ばれる農業先進地区になるために尽力した山崎延吉の名もあり、山崎ならではのさまざまなアイデアがだされ、運動を展開していったようである。

昭和 23 (1948) 年 10 月 1 日には愛知用水開発期成会が発足され、このとき「愛知用水」が公式名称となった。農民に用水の必要性を訴えていくため、啓蒙活動が部落ごとにおこなわれることになった。しかしただ呼びかけても集会への参加は見込めない。そこで愛知用水の説明会を成功させるため、浪曲が使われたという。浪曲師・梅ヶ枝鶯による明治用水の発案者・都築弥厚の苦心談の浪曲だったという。梅ヶ枝鶯のその浪曲を探してみることにした。

はじめは映画だった

愛知用水実現のためにはじめに動き出した久野庄太郎は、多くの執筆を残し、新聞・雑誌の記事やラジオ・テレビの番組出演も残っている。久野家に残っていた古い映像を見せていただくと、これまで記されていなかったこと、浪曲をおこなう前に試みたことがあると久野庄太郎が語っていた。昭和 50 (1975) 年 6 月 21 日 NHK 教育放送の教養特集「近代日本の足跡-愛知用水-」で久野庄太郎が語ったことを記してみよう。

始まりは映画をやったです。映画をやるとね、子どもたちが来る。聞かせたい人に聞かせられん、わいわい子どもたちが来てね。これはいかんで浪花節のほうがいいって途中から方式変えて、停電するしね、だから浪花節が良からうってことになって、梅ヶ枝鶯という上手な浪花節がいましてね、かなり売れとったですよ。その人が台本持つてるっていうことに、都築弥厚のね、明治用水の、じゃあそれをひとつやってもらおうということになって、それをやってもらって、私がその幕間にこれを話して、そして次から次にいったですね。

この話の内容が正確であったかを確認することはできない。しかし当時であれば停電は十分考えられる。愛知用水運動には早い段階で映画があったこと、そして映画に代わって浪曲が採用されたこと、浪曲師は梅ヶ枝鶯といい、既に明治用水の都築弥厚のことを浪曲の台本にして持っていたということがわかった。

梅ヶ枝鶯の浪曲「都築弥厚の苦心談」

『水の思想 土の理想-世紀の大事業愛知用水-』(2010 年刊行)によると、昭和 23 (1948) 年秋に山崎延吉を師とする愛知県内の篤農家グループ・研農倶楽部の 20 人ほどが集められ、愛知用水の説明会がおこなわれている。ゲストに梅ヶ枝鶯が登場した。この本の中では浪曲の名前は「安城

ヶ原一報農偉人都築弥厚と日本のデンマーク」となっている。また昭和 51（1976）年制作のレコード『開けゆく安城ヶ原』（口演 三門博）から、浪曲の一部が引用されている。

年代からすると、この作品が梅ヶ枝鶯の上演したものと同一かどうかは確認の必要があるだろう。しかしミツカン水の文化センター機関誌『水の文化』36号「愛知用水 50年」には次のように記されている。

この年（遡注 1948年）の9月から10月にかけて、賛同者を募るために久野らは説明会を開いた。集まった聴衆の心を引きつけるのに浪曲「開けゆく安城ヶ原一偉人弥厚と日本のデンマーク」（三門博作）を梅ヶ枝（うめがえ）鶯を招いて披露した。聴衆が感動して聞き入ったあとに、久野がおおよそ縦4m横2mもある大きな「愛知用水概要図」を掲げて説明した。話も聴衆を魅了して人気を博し、各町村とも競って説明会を行なった。延べ70回に及ぶ説明会の成果もあって、知多半島の1市25町村すべてが参加する愛知用水開発期成会が設立された。

また、水・河川・湖沼関係文献研究会の古賀邦雄氏は、「ダム」の書誌あれこれ（70）～牧尾ダムと愛知用水（上）～」（『月刊ダム日本』）に掲載記事を一部修正）に次のように記している。

昭和23年7月23日この愛知用水の計画概要をもって、農村同志会が中心となって各学区ごとに説明会を開催。その時の決議事項は①市町村に強力に働きかける②知多郡外、愛知、東西春日井郡、三河部にも働きかける③水源地の現地見学会を実施する④市町村内各学区ごとの説明会を開催する⑤浪曲師三門博を呼んで「都築弥厚の苦心談」で人を集める、ことになった。浪曲師の件は三門博のギャラが高すぎるために、梅枝鶯に変わったという。（中略）久野庄太郎らは、梅が枝鶯の浪曲「都築弥厚の生涯」を掲げ、各地区に愛知用水の計画の説明に回った。「浪曲がクライマックスに達し、都築弥厚翁が地域の住民が反対する中、夜、提灯の明かりで測量するあたりになって、高岡村の太田一男が男泣きに、おいおい泣き始めた。つづいて付近の一人、二人が涙にむせんで泣き出し、つづいて全員がおいおいと男泣きし始めた。みんな純な人ばかり、弥厚さんの苦心談に久野庄太郎さんの苦心を思いやり、みんな泣いた。

浪曲名は「都築弥厚の苦心談」であったこと、ギャラの問題で梅ヶ枝鶯になったこと、この文章の引用は、浜島辰雄編著『愛知用水と不老会』（財団法人不老会・2005年）からだということもわかった。

水資源機構による「愛知用水 50周年記念 愛知用水年表」（未定稿）にも次のように記されている。

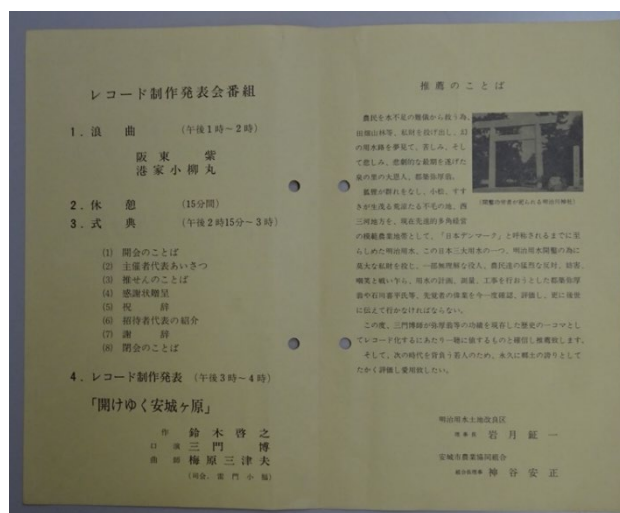
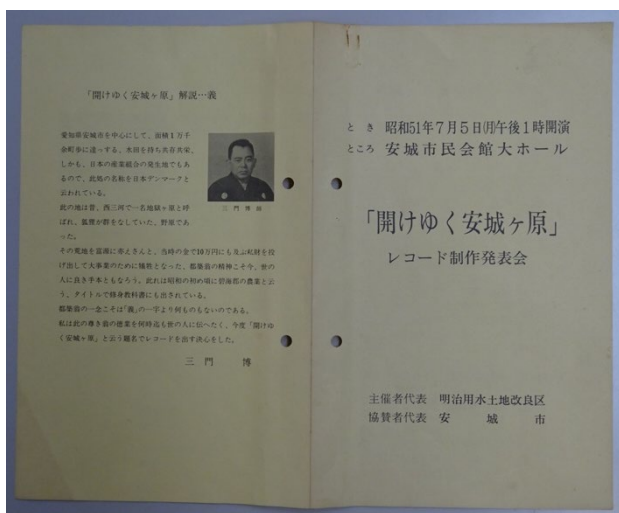
昭和23年9月～10月 市町村学区説明会実施 浪曲「都築弥厚翁の苦心談」に聴衆が感激している幕間に久野氏が「愛知用水概要図」（縦4m、横2m）を掲げて説明した。話も聴衆を魅了して人気を博し、各町村とも競って説明会がのべ70回開かれた。

三門博「開けゆく安城ヶ原 偉人弥厚と日本デンマーク」

そこで明治用水のことが浪曲になっていることから、明治用水土地改良区理事・竹内清晴氏に浪

曲のことを尋ねた。すると、「昭和 51 年にレコード化された三門博（みかどひろし、本名・鈴木重太郎、ペンネーム・鈴木啓之（すずきひろゆき））作のものなら明治用水の資料室で保管されています。三門は戦中戦後にヒットを出したとのことですので山崎先生がお聞かせになったかもしれません」とのことであった。但しレコードのため、竹内氏も実際には聞いたことがないということで、愛知用水土地改良区でデジタル化を進めてくださることになった。

さっそく借りてきたレコードの包みを開けたところ、これまで袋から出されたことがないというような状態の新品で、明治用水土地改良区にはこのレコードが数枚あった。中にはレコード製作発表会の式次第が書かれた紙も入っていた。レコードの内容は以下の通りである。



「開けゆく安城ヶ原 偉人弥厚と日本デンマーク」

作：鈴木啓之

口演：三門 博（注 鈴木啓之と同一人物）

曲師：梅原三津夫

ローオンレコード株式会社

A 面 23 分 44 秒

B 面 25 分 12 秒

レコードについてはその後、元水資源開発公団（現水資源機構）・井爪宏氏が既にデータ化していることがわかり、その CD をいただき、聞くことができた。

三門博の弟子・三門柳氏との出会い

レコードを入手したことから、三門博がどのように関わっていたのかを調べてみることにした。インターネットで検索していると、日本浪曲協会に所属している協会参与・三門柳（みかどやなぎ）氏の師匠が三門博であることがわかり、梅ヶ枝鶯のことを含め問い合わせしてみた。日本浪曲協会第 9 代会長を昭和 43～44 年とつとめた三門博に、昭和 35（1960）年に入門した三門柳氏は入門のきっかけを日本浪曲協会 HP に「地方巡業で来駕された師匠の舞台、初めて接した生の浪曲、何も分からない筈の十代の私は、不思議な感慨に包まれました。それは、今思えば確かなる本能だったのです。諸々の難関を経て、入門させて頂きました」と記している。入門時は愛知用水通水以前では

あるものの、梅ヶ枝鶯が愛知用水運動のなかで浪曲を聞かせた時期とは異なる。それでも柳氏は返答をくださった。その手紙によれば、三門博の浪曲「開けゆく安城ヶ原 偉人弥と日本とデンマーク」は、「明治用水の発案者 都筑弥厚翁の業績を称え、郷土の偉人の伝記を広く後世に伝えるべき、安城の意図のもと、恩師三門博へ依頼され、師が史実に基づいて伝記をレコード化」したものだということだった。また完成後、招聘を受けて公演されたという。作品は全て三門博本人が作り、脚色をおこなったということだ。発売元であるローオンレコード株式会社はなくなっており、梅ヶ枝鶯は大阪の人だということだけでそれ以外は分からなかった。

後日、三門柳氏から改めて手紙と三門博氏に関する雑誌記事をいただいた。お礼の電話をかけ、しばしお話しした内容から、次のようなことがわかった。今回、丁寧にやり取りしてくださったのは、三門博が亡くなってちょうど20年（2011年10月に亡くなる）というタイミングでの問い合わせだったとのことで、このめぐり合わせを大変喜んでくださった。ただ、三門柳氏は最後の弟子で、三門博氏の全盛期を知らないという。「暎の母」の長谷川伸氏の直門で、美空ひばりに浪曲を教えたことなどについても、直接見聞きすることはできなかったという。ただ思い出してみれば、三門博は同じ話をする人ではなかったが、「安城市から話があった」ということを話していた記憶があるという。

こちらから浪曲師としてはじめに候補となったのは三門博であったが、出演料の関係で諦めたという話が残っていることを伝えたところ、弟子と言えるのは、三門博は決してギャラを理由に話を断る人ではなかったということだった。

後日、三門博の浪曲「開けゆく安城ヶ原 偉人弥と日本とデンマーク」を三門柳氏にお送りしたところ、次の返事があった。

お心に掛けられた沢山の資料が届きました。開封致し先ずまっ先に恩師三門先生のCDを心して拝聴させて頂きました。語りの場面にBGMが流れて居りましたが、先生には珍しく、意図が有っての殊と拝察致し乍ら、先生の語りは宛もドラマのごとく、そして演じられる至芸、先生の演じられる一挙手一投足を懐かしく想像致し、機微に改めて接する貴重な時間で御座いました。

三門柳氏の話からは梅ヶ枝鶯の消息等をうかがい知ることはできなかったが、やはりギャラの問題については三門博本人との交渉があったのではなく、地元の興行士による判断であっただろうことが考えられる。

梅ヶ枝鶯に曲幕を贈る

三門博による浪曲での説明会は叶わなかったが、梅ヶ枝鶯の浪曲によって、説明会は成功をおさめ、多くの人を集めることができた。

『愛知用水土地改良区五十年の歩み』（愛知用水土地改良区、2002年、p.28-29）には「梅ヶ枝鶯に曲幕を贈る-昭和23年11月頃」と題して、次の記述がある。

現地説明会も板に付き、久野は自宅に研農倶楽部の面々を集めて、愛知用水計画の説明会を開いた。

山崎延吉を講師として濱島が愛知用水計画を説明、梅ヶ枝鶯が都筑弥厚の苦心談の浪曲を行

った。集まった主な面々は、次のとおりである。

三浦青一、伊藤告重、太田一男、丹羽甚作、原田新治、小野田卓司、大岩源平、富谷茂吉、稲葉忠雄、水野源式、山口治兵、加古与市、加藤吠一、平岩幸一

その曲がクライマックスとなると、みんな都築弥厚の苦心談に感激し、その中の太田一男が久野の心中を思い感極まったの男泣きを始めた。皆泣いた。そこで早速、皆で金を集め、絹布を求め、山崎先生に揮着してもらってできたのが、曲幕である。

ここに浪曲に涙を流す太田一男氏という人物が記録されている。太田一男氏の感動する姿から、曲幕を送る場面は一連の流れを持っているように感じられるが、後日、山崎延吉日記（安城市歴史博物館所蔵）により、そこには数ヶ月が経っていたことがわかった（改行は／で示した）。

昭和 24（1949）年 1 月 13 日

久野来り梅の枝鶯丈／へのテーブル掛に執筆／した

久野の依頼で梅の枝／鶯のテーブル掛は二枚／書いた

久野より愛知用水／印刷物を受取った

久野庄太郎氏は数ヶ月の後、テーブル掛けを 2 枚、山崎延吉氏の自宅に持ってきたのである。山崎氏への揮毫の依頼はたいへん多く、日記を見ても、ほぼ日課とも言える量をこなしていた。30 枚ほど書いたり、本のサインについては千部単位で引き受けていることがわかる。安城市歴史博物館学芸員・野上氏の話では、山崎延吉の講演会場では墨をすって揮毫を待っている人もいたらしい。山崎氏はそれを嫌がることなく引き受けたという。この曲幕については愛知県庁のどこかにあるはずということだが、未だ行方は不明である。

（公財）愛知・豊川用水振興協会研究員 達 志保